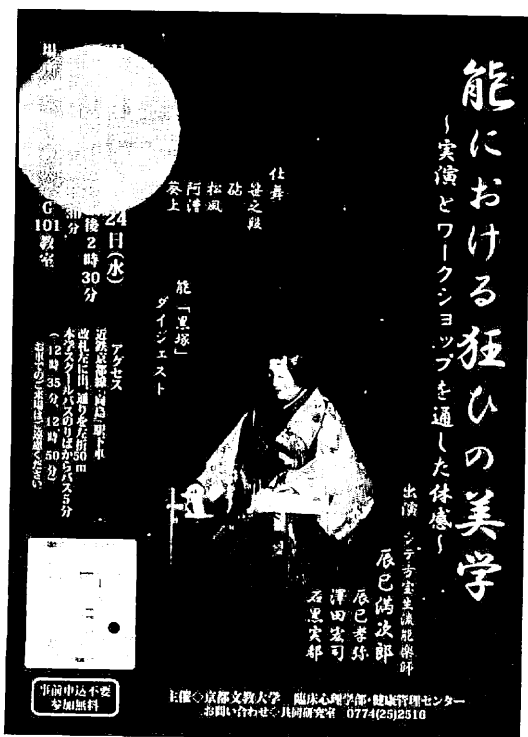


「能における狂ひの美学」

—実演とワークショップを通じた体感—

シテ方宝生流 能楽師

辰巳 満次郎
石黒 実都 辰巳 孝弥 澤田 宏司



*本記録は2009年6月24日(水)3時限目に京都文教大学弘誓館101教室にて開催された、本学臨床心理学部・健康管理センター主催による日本の精神性をテーマとした能の講座の録画記録を編集したものである。読みやすくするために、表現の重複など最小限の変更を加え文脈を損なわない範囲で表現を改めた。

辰巳満次郎：こんにちは ようこそいらっしゃいました。今日はですね「能における狂ひの美学」狂ひと書いて、これはくくるい>と読むんです。能のパフォーマンスに於いての狂い、い

ろいろあるんですが、こういうお話をせっかく我々役者がさせて頂くわけですから実演を通して、或いは皆様もお昼を食べてちょっと眠そうな方もいらっしゃると思いますので眠気覚ましに、まずは体を動かしていただきたいと思います。

能の表現というのは、ご存知のように日本のものは全てそうですが、特に能に於ける身体表現というものは極力動きを省いて、まっ、これは前衛的だと思うわけです。1000年以上前から実はやっているんですが、未だに新しい演出だと私どもは思っています。例えば我々の表裏一体といいますか一心同体といいますか狂言というのがありますが、彼らの表現とはまた違って、例えば悲しいときに「えんえんえーん」と泣き声を出せば分かりやすい、嬉しいときに「わっはっは」と笑えば分かりやすい。ところがそれをしないで最小の表現で、見ている人にわかっていただく。想像力に頼った世界ですね。いま想像力というものがかたんと面倒くさい時代になってきて、ポーっとしていても楽しませてくれるTVでもDVDでもありますが、あえて人間の気持ち、想像力に頼った芸術というのが能といえます。ちょっとやってみますけれども、これは後で皆さんにもやっていただきます。全員に。その場で出来ることばかりです。

【ワークショップ】

能の基本姿勢は「構え」といわれますが、足を揃えて。ということでその場で皆さんお立ちいただけますか。今日しっかり覚えてかえって一生忘れないようにしていただきたいと思いま

す。本来なら足袋を履いて、すり足でやっても
 らいたいですが、それは家に帰ってからやって
 いただくことにして、足を出来たら揃えていた
 だきます。それから重心は足の親指にかける、
 両足の親指。わかりますか。よく靴が外側減つ
 ている人がいますがこれは体に悪い重心のかけ
 方、必ず病気になります。膝をまげてください。
 背中伸ばしてお腹伸ばして顎をひいて遠くを見
 る。肩甲骨をくつつけるように、ただし肩甲骨
 をくつつけますとこうなる。これは美しい姿勢
 ではないですね。肘は前に。頭の上にお皿を載
 せたようなつもりで、両肘を軽く張ってくださ
 い。これをこうダラーとしてるとよくない。脇
 の下にボールを挟んだような気持ち。どうです
 か。遠くを見る。今は出来ませんがすり足こう
 やって歩きます。いえ歩かなくていいですよ。
 あとで廊下をこうやって歩いてください。頭
 の上にお皿を載せたようなつもり。頭が動か
 ないように、こうやって動きます。（動いてみ
 せる）この構え分かったと思いますが、この構
 えだけでもちょっとしんどいと思います。膝を
 まげて、この状態をずっとキープするわけ
 です。それからちょっと狭いかも知れませんが、
 動いていただきます。

「シマリ」、喜怒哀楽の表現で能面は中間表
 情といいますね。ずっとこの姿勢で聞いてて
 くださいよ、トレーニングだと思って。無表情
 の代名詞のようにいわれますが、実はうつむく
 と悲しそうに見える。ちょっと上を向くとうれ
 しそうに見えるように、まあ一番表情豊かど
 んな顔にもなるように、ちょっと口を半開き
 でね、ほっとしたような顔をしてるわけ
 ですけど。つまりうつむくことによって悲
 しいことを表します。能では能面をつ
 けない役柄もあるわけですが、悲しい
 ときに怖い顔をしない。一切そのま
 まの顔でちょっと顔をうつむいてやる。
 これで悲しいことを表すんですね。誰
 でもがっかりしたときにはこうなる、
 こうやると芸術でもなんでもなくな
 る。このままの姿勢で前に体を倒す。
 その時に当然、重心は前に倒れますが
 膝を曲げて更に重心を前に倒して静か
 にうつむく、出来ますか。いつも小
 学生にやらせています。期待して

ます今日。膝を曲げながら背中とお腹
 伸ばしながらあごを引きながらちよ
 っとうつむく。はい、そのままに
 しててください。チェックします
 から。単にうなだれている人がいま
 すけど。はい戻してください。こ
 れは悲しいときの表現です。更
 に悲しいときは涙がこぼれる。今
 は平気でこのまま泣いたり、この
 辺が黒くなりながら泣いている人
 がいますけれども。昔はこういう
 着物を着てますから袂があります。
 袖をシマル、袖をしめらすとい
 う意味ね、涙を受け止める。こ
 ういう格好で涙を受け止めていた
 らしい。これをやると芝居、歌舞
 伎の世界。我々の場合はただこ
 うやります。これを「シマリ」と
 いいます。これで思いっきり泣
 いているんですね。こういう表
 現です。これちょっとやってみ
 みましょうか。左手の手のひら
 を前に伸ばしてください。膝を
 曲げて背中伸ばしたままうつむ
 きながら、そのままストップ。チ
 ェックします。泣いているのに
 笑ってる人がいますね。はいゆ
 っくり降ろしてくださいほぼ結
 構です。これポイントがあつて、
 お分かりと思いますが、角度位
 置これが非常に大事。目にくっ
 つけないということはちょっと
 顔から離れますから、目の延長
 だと前から見ると笑っているよ
 うに見える、高い人は熱を測っ
 ている、視力検査、100円おっ
 こつてないか、飲みすぎ、みた
 いにいろんな人がいますけど。
 このポイントは左手の薬指で右
 の眉毛を触るようにする。そう
 すると泣いているように見え
 る。これ重要ですからね。これ
 覚えたい方がいい。いいです
 か、上手に泣く練習です。もう
 一遍やってみましょう。静かに
 しずかにゆっくり。悲しいこと
 考えながらするということです。
 降ろすときもゆっくり。はいそ
 うです。これじょうずになると
 ね、いいことがある。なんか喧
 嘩したときにね「お前あほか！」
 （ゆっくりシマル）。これで解
 決することがたまにある。あん
 まり使いすぎるとよくないで
 すね。一生に5回ぐらいです。こ
 れをシマリといいます。

じゃあ今度は強い表現、強い気持
 ちを表す時はどうしたらいいか。
 地団駄を踏むって聴いたこと
 ありますね。これを「足拍子」で
 表します。

能は板の間でやります、下は空洞になっています、音がするわけです。足を踏み鳴らすことで強い気持ちを表現します。4回踏むんです。ちょっとやってみていいですか。一緒にね。構えてください。左足からトントントントン一緒に、はい。いいですね。4回ただ踏んでも音楽的にも何でもないので、トントントンと4つめを早く踏む。全部同じ音だと芸術的じゃない。4回目を強く。トントントン！いいですか、はい、いきます。左足からはい。ブートキャンプみたいになってきましたけどね。右斜め45度を向きながらやってください、まだ右向かなくていいです。まっすぐ向いてください。いきます。このとき頭のお皿が落ちこまないように、左から右向きながら4つ、トントントン、完璧ですね。

その後更に強い怒りを表すには、「顔をキル」「面をキル」といいますが、少し上を向いておいてぐっと顔を切る。これが怒りの最大のポーズ。私に向かって一斉に初対面でそんなに恨みもないと思いますが、上を向いてぐいっと私を見る。その後3秒は笑わない。トントントン上を向いて顔を切る。はいいきます。はい！上を向いて顔を切る！あんまり怖くないですね。時間がありませんのでこれ最初から続けて連続技でやってみます。

最初はシオリ。悲しいこと恨めしいことがあります。それからだんだん怒りが込み上げてくる。正に狂いです。怒りが込み上げてくるけれど動きはゆっくり、その中に怒りのパワーがある。それが極致に達して拍子、トントントン顔を切る、こういう物語でいきます。いいですか。最初はシオリから、いきますよ。左手広げて、ゆっくりゆっくり、早いはやい静かにしずかに、涙はボロボロ落ちているけれども静かに、怒りが込み上げてくるけれども、体の動きはゆっくりゆっくり体の中のエネルギーは、魂はすぐ揺れ動いています。拍子、左から、はい。トントントン上を向いて顔をキル！はい有難うございました。はいお座りください。食後の眠気覚ましはこれぐらいにします。

【実演】

次に簡単な実演を観ていただきます。いまから「仕舞」というのを観ていただきます。仕舞というものは「舞をつかまつる」と書きますが、能を1曲やると短いもので30分から40分、長いものでは2時間ぐらいになります。それをフルにやっけてもいいんですが、例えばむかしアンコールというものがあって、見終わったあとに“面白かったよかった、もうちょっと見たい”というのは、西洋だけでなく日本でももちろんあったわけです。それを最後に「仕舞をいたします」と、ごく短い1曲のエッセンスの面白いところだけを3分ぐらいやったんです。必ず催しの最後にやったんです。それでくおしまい>といいます。これほんとの話です。これが「しまい」の語源。物事を終わることをおしまいといいます。なぜおしまいというのか。物をしまう、片付ける。実はこれから来ているんです。この「仕舞」を今日は5曲観ていただきます。能では5番といいます。

「笹の段」（ささのだん）

最初にお見せするのは「百万」（ひやくまん）という曲です。これは女性の名前です。奈良の西大寺ありますね。お寺では縁日、お祭りに人々が集まります。お母さんがちっちゃい子供を連れて行った。人が大勢いて西大寺の柳のあたりで生き別れてしまった。迷子になってしまった、それきり会えない。さてどうするか、交番に届けることも出来ない。能の世界は中世の世界です。物狂いになる。「物狂い」女物狂い、男物狂い、ものに狂った表情。ものに狂うというのは要するに、精神的に病的にということではなくてパフォーマンスとして、狂おしいというそういう意味であります。

恋しいわが子を探すために何をするか、手取り早くパフォーマンスになる。人の多く集まる所、嵯峨の清涼寺に雇われて芸人として面白おかしく舞を舞います。お寺で雇われるということは、仏教の徳を広める為に宗教を広める布教のために、面白おかしく、ただお説教をしても飽きちゃってつまらない、そうじゃない人もいますが、人々を集めて楽しませてその中に

仏の道を説く。そういうのがいわゆる芸人として舞台に出て、寺社に囲われていました。これは実際の話。我々の祖先もそうです。面白おかしく謡ったり、舞う中で自分の身の上を話す。その中には当然西大寺で子供と生き別れた話などいろんなことをする。その一部分で、「笹の段」という部分があります。これは<狂い笹>といまして能におけます物狂いのアイテム。これを持っているだけで、あっあれは物狂いだ、とみんながわかる。皆近寄ってきて何か面白いことを言うんだろう謡うんだろう舞うんだろう面白そうだなあ。人が集まってきます。いろんなお寺の縁起を喋るなかで、自分の子供を捜す情報を得る。この百万も最終的には人が集まって情報を得て、わが子にめでたく行き会うというものです。その笹の段、御覧いただきます。(実演)

最後に「わが子に会わんためなり」と聞こえましたかね。もちろん実演のときはマイクを使っておりましたが、笹をおいて最後に合掌しました。仏に祈って、恋しいわが子に会えますようにと謡って終わります。

「砧」(きぬた)

反物を打ってやわらかくする道具、生地を叩いてやわらかくするものを砧といいます。恋しい人を思う狂い。皆さんも経験がある・・かも、どうか分かりませんが。

夫の帰りを待ちわびている奥さん、非常に身分の高い妻です。なかなか帰ってこない何年も帰ってこない。都からね、出張して、訴訟とかそんなことがあってなかなか帰ってこないことは昔よくあったようです。今年の暮れには帰ってくるような情報があるんだけどなかなか帰ってこない。恋しい夫を待ちわびて気も狂わんばかり、恋しさが募るばかり。ふっと何か音が聞こえる。召使の女に、「あの音はなんじゃ」、はいあれは里人の打つ砧でございます。「そうか砧がそれを自分も鳴らしてみたい。」そしてその音が恋しい離れた都の夫のところへ届いたら何かきつと知らせが来るかもしれない。それを打ってみよう。砧なんて里人の卑しい身分の者がやるもので奥様のなさるようなことで

はありませんが、それで気持ちが晴れるならどうぞということも勤めるわけです。砧の音を「ほろほろ」と表現しています。いまならんとんとか、かんかんというかもしれませんが、昔の表現は涙が「ほろほろ」と落ちるような悲しい音で気持ちを表現しました。ものに狂ってはいるんですがそれが悲しい。そういう気持ちというもの表現されている。名曲中の名曲です。砧の一部です。(実演)

実はこの後都から知らせがあって、やはり今年の暮れもご主人様は帰って来ないそうです。それを聞いてあまりの悲しさにそのまま命を落としてしまいます。そういう悲しい話です。

「松風」(まつかぜ)

妄執に苦しむ。行平、須磨の浦のお話です。光源氏もそうですが、須磨に流されて幽閉されるわけですが、行平もそうです。そのときに松風村雨という美しい姉妹がいて海女ですね。海で仕事をする女性に恋をするわけです。やがて行平は都へ帰っていくわけですが、姉妹はいつもそれを悲しんでいるわけです。須磨の浦には一本の松があります。今でも碑が須磨の浦にあると思いますが、その松を行平と想って大事に眺めていたという逸話があります。後日お坊さんが何十年か、何百年か分かりませんが、通りかかったときに女性が現れる。それが実は松風の霊です。妄執に苦しむ、つまり成仏できない霊。それは恋しい寂しいという気持ちが強すぎて成仏できないという考え方です。罪障懺悔という言葉があって、その場面その理由を再現して見せてお坊さんに救いを求めるという手法です。ここに松があると考えていただいて松を行平と見立て、この松があるゆえに自分達は行平と契っていたんだと狂おしく舞う。松風の亡霊が主人公です。最後にはこの妄執を晴らしてください、鎮めてください。お坊さんの力で何とか成仏させてくださいとお願ひします。ここにお坊さんが居るんですが、手を合わせて成仏していきます。妄執の狂いです。(実演)

最後に「松風ばかりや残るらん」。何が松風ばかり残るのか。夢幻能といまして。能にはいろんな手法があって、実際にはたぶん亡霊が

現れたんだけど、ふっと気がつくとき夜が明けて今は夢だったのか。お坊さんの夢だったのか。後には松原に風ばかりが残っていた。夢まぼろしの世界だったのかと終わるようなのが夢幻能という手法であります。成仏できない苦しみを描いたものです。

「阿漕」(あこぎ)

阿漕が浦、あこぎな商売。時代劇なんかみんなは見ないと思うけれど、「阿漕よのう、お代官様こそ」なんていうのがあったんですが最近見ませんけれども。悪いことするなあ、ずるいな、あくどいなあ、あこぎ・・・人名なんです。ほんとに阿漕さん気の毒で、いまだにこんな言われ方して、だから成仏できないっていう話でね。これは伊勢湾に阿漕が浦という名前のついた浦があります。何故名前が付いたのか、実は伊勢湾というのは伊勢大神宮、伊勢神宮の神様に捧げる海産物を採る場所であって禁猟区、そこで漁をしちゃあいけませんよ。ということは神様にお供え物する分だけの漁しかしませんから、みんな他の漁師たちはそこに入りません。ということは沢山魚がいる。そういうところでみんな密漁をするわけですね。いくらでも取れるから入れ食いで密猟者が絶えない。これは日本全国今だにあるわけですが。夜な夜なこっそりと阿漕っていう漁師が魚を獲っていた。「度重なれば現れにけり」という歌が昔からあるんですが、たびたびやっていたものでついに発見されて発覚した。里人村人にふん捕まって糞巻きにされ、海に放り込まれて殺されてしまいます。そんな恐ろしい事件があったわけです。もちろんその人は成仏できず地獄に堕ちたまま、密漁をした罰当たりな行為プラス、未だに阿漕が浦なんていう名前を付けられて悪の代表みたいに言われている自分がある。そういう苦しみ地獄の責め苦プラス未来永劫苦しまなければいけない現世に対しての自分がある。そういうことで苦しい、狂う。阿漕という漁師の亡霊の話です。この舞を見ていただきます。(実演)

最後に沈んでゆくわけですが。これは歌舞伎や芝居の世界なら舞台が「どんどんどんどん」と沈んでいくんですが能の世界ではそうい

うことができない。ここにお坊さんがいて助けたまえ。私が成仏できるようにお祈りくださいといいながら最後海に沈んで消えます。能の演出です。次は仕舞最後の曲です。

「葵上」(あおいのうえ)

これは有名な曲ですね。源氏物語と聞いただけで、ああ嫌い、見たくない、関係ねえ、という人が多いんですけど、去年千年紀ということで源氏物語フェスティバルもあって、私も新作能を京都でさせて頂きました。源氏物語のテーマは現在とぜんぜん変わりがありません。曲名は葵上ですが、葵上は登場人物ではありません。厳密にいうと出てくるんですが着物が一枚ここにあるだけです。着物一枚置いてあることで葵上が原因不明の病気になることを表します。面白いと思いませんか？この演出。実際に人間が寝ているわけにはいかない、能の世界ではね、みっともない。主人公は六条御息所、高貴な方で身分の高い人です。光源氏というモテモテの男性がいて、まあその人にいろんな彼女がいる。正妻は葵上。六条御息所と付き合ったりしていた。六条御息所はものすごく愛したんですけど、今でいえば重い、暑苦しい。可愛そうですね。だんだん嫌がられて愛が離れていく。恨めしい気持ちばかり持つので余計離れていく。これは亡霊ではなく生霊です。生きている人間。死んでない。もう恨みをずっと持ち続けていて、夜な夜な自分の体から幽体離脱っていうんですかね、出て行ってしまおう。どうやらそうらしいことは本人も気付いている。自分の感情はそうなんだけれど、自分の意志とは関係なく勝手に出て行って毎晩毎晩相手を苦しめる。自分は実は嫌なんです。そういうことをすればするほど光源氏が自分から離れていくことも実は分かっている。自分のそういう性格も嫌でしょうがないが、どうしようもない、そんな状態。あるとき、左大臣の娘葵上は非常に身分の高い人ですが、どうも原因不明の病気になる。昔はお祈りしたり加持祈祷したりいろんなことをする。それでもダメな場合にはこれは物の怪が憑いている。物の怪の狂い、怨霊の仕業だ。誰かが祟っているんだと考えたんです。一体何者が憑いて

いるか調査しようということで、呼ばれたのが照日ノ巫女という人。まあイタコ、霊媒師です。霊を呼び寄せる。口寄せといいますが、その口からその人の言葉が出てくる。また梓弓、ピーンピーンと弓を鳴らす。能では弓は出ませんが、楽器でそういう雰囲気を表します。弓の音に誘われて生霊が出てくる。それは照日ノ巫女にしか見えない。いろいろ言葉を交わす。誰も聞こえていない状態。やがて六条御息所だと明かします。照日ノ巫女はいろいろと説得します。でもダメ。「枕の段」枕元に襲い掛かる、恨みが込み上げて襲い掛かる場面。しかしいわゆる能は芸術的なものですから、今回は美学がテーマですが、ただ恐ろしく襲い掛かるだけではない。その前に光源氏の愛を取り戻したい、自分はまだ愛している。それがまず第一前提です。光源氏と光る螢を掛けて、螢を沢辺に追いかけるようなシーンがあったり、恨んで殺してやるという場面にです。ただ恐ろしいだけではない、そういう能の表現の仕方。最後に襲い掛かって冥界あの世に連れて行こうと襲い掛かるシーンで終わります。(実演)

仕舞を観ていただきましたが、能はだいたい200番ぐらいあります。昔はもっと1000曲ぐらいどんどん新作能を作っていましたが、江戸時代になって200曲ぐらいになって、そのうちの5曲ですからまだまだいろいろありますが、今日は「狂いの美学」というテーマでやらせて頂きました。

引き続き「黒塚」、流儀によっては「安達原」安達が原の鬼ばあといいますが、そのお話をテーマにした「黒塚」という能をダイジェスト版で、お目にかけてたいと思います。ちょっと着替えてまいりますので、その間に石黒実都さんに解説をお願いします。

【能「黒塚」ダイジェスト】

石黒実都：皆様、前半如何だったでしょうか。これから本日のメインの出しものですね、能「黒塚」をダイジェストで御覧いただきます。安達が原の鬼の話と申しましたが、どういう鬼であるのか。そのへんが今日のテーマの「狂い」と関係してまいります。まず季節は秋です。

とっても綺麗なポスターを作って頂きました。皆様に思い描いて頂きたいのですが、ススキが原、一面に黄金色に輝いた月の光でススキの穂が金色に光り輝いている、ただしものすごく寂しい山の中です。そこに修行者が通り掛かる。シテに対してワキという役回りの人がおりまして、お客様代表みたいな感じでシテから巧みに話を、その人の人生なりを聞きだしていく聞き手のような役の人がいます。修行者が山の中を通りかかると、暮れていいはずもない日が突然暮れてしまいます。行きくれて真っ暗、一步も前に進めないような状態でほんとに何も無いススキの原に一軒の家の明かりをみつけます。天の助けと「宿を貸してください、一晩止めてください」と頼みます。戸を開けもせず中から女の人の声で、「非常に貧しいみずぼらしい家で人を泊めるようなことは出来ません」「ほんとに困っているので助けてください」と修行者が頼むと、じゃあと扉をそっとあけて中に迎え入れます。能では貧しい小屋の象徴として柴屋という中が透けて見える、四角い、人が一人入れるような小屋の小道具が置かれます。修行者にはこの人がこの段階では鬼だとは分かりません。人生に疲れているすごくさびしげな中年の女性が現れ、お坊さんの中にお通しします。象徴的な作り物として梓柳輪(わくかせわ)という糸車が部屋の隅においてあります。僧がこれはいったい何ですかと尋ねます。その女性は自分達のように貧しい女が生活の糧にする仕事ですと説明すると、是非その糸車をまわしているところを見てみたいものだと言います。そんな恥ずかしい姿はお客様にお見せしたくないと一度は断りますが、是非見せてくださいとお願いされて、糸を繰るところを見せます。前半の一番の見所で、狂いの最たるテーマになっているであろう部分だと思えます。安達が原の鬼は、もともと人をとって食う鬼という説もありますが、能ではそうは描かれていない。もともとはむしろ高貴な身分の女性だったのではないかと描かれている。糸車を使うときには糸紡ぎの唄、糸繰り唄。まっ、子守りには子守唄、芝刈りには芝刈り唄、労働歌というのがありますよね。単調な作業をする時にリズムよくテンポよくこ

なしていくための唄。労働をしながら歌う唄として糸紡ぎの唄というのが出てきます。その歌詞に源氏物語のなかの一場面を匂わせるような美しい日本語が散りばめられています。ひじょうに雅な世界なんです。糸車を回す。ずっとずっと同じことの繰り返し。同じことがずーっとずーっと繰り返されていく。彼女の人生がどうしてこうなったのかは分からないが、こんな山深いところにたった一人で住んでいるうちに、たぶん命を落とすことも出来ない鬼になってしまった。何がきっかけかは分かりません。もしかしたら何かで命を繋ぐために人の肉を食べてしまったことがきっかけで鬼になってしまったかもしれない。とにかくこの人はずーっと、たぶん旅の僧が生まれるより前からまた死んだ後も今も、安達が原というところに住み続けている。絶ちたくても断ち切れない自分の人生の象徴として、繰り返しても繰り返しても絶対に尽きない糸というのがあって、輪廻という言葉もありますが、自分の終わらない人生に、だんだん気持ちが常の状態、平らな状態でなくなってしまう。最初は優美で穏やかに楽しく歌っていたが、それを続けている間に断ちたくても断ちがたい自分の人生がオーバーラップされてきて、本当に泣き崩れてしまう。そういうシーンですね。その時点ではもちろんその人が鬼ということは全く分からない。そこで突然、この人達をどうやってもてなそうかと考え、「とても寒いので今から私が薪を取ってきて、焚火をしてこの寒い夜を暖めましょう。」そういうことを申し出て、この女性はひとり暗い山の中に戻っていきます。ただし、その去り際にわざわざ戻ってきて「決して私の閨の内（寝室）だけは覗かないでください。」鶴の恩返しみたいです。そう釘をさして出ていく。この時点で旅の僧は全く疑ってはいない。その女性がなんでこんなところで一人で住んでいるの？とか、非常に純粋な人たちだったと思います。旅をしながら修行をする人は、能にも非常によく登場しますが、決して人を疑わない。自分が正しいことをしているので相手も正しいことをしているというスタンスだと思いますが、全く疑っていない。この人の連れてくる下の者、使い走りのようなことをして

いる人を連れていますが、これをアイ狂言といいます。この人は先ほどの言葉が気になってしょうがない。なんでわざわざ戻ってきて寝室の中を見るなどいったのか？そこからまた後半の物語が展開していくのですが、まず想像していただきたいのは、月明かりの中で黄金色に輝くスキ野原、その寂しいところにたった一人で住んでいる中年の女性です。面の話も先ほど出ましたけれども、ちょっと憂いを含んだ面の表情とか、そういうものを少しご覧頂きたい。この人が後半どのように変わってしまうのかもちょっと想像しながら。今日はワキの僧はいなくて、全てシテ一人の演技となります。では黒塚の前半どうぞご覧ください。（実演）

寒い夜の中にひとりで女性は薪をとりに行ってしまう。修行僧の下働きをする能力という人は、わざわざ見るなどいわれたことが気になって仕様がな。見ないと約束したのはお坊様で私ではないので私が見るぶんにはかまわないだろう、というわけの分からない理屈で、あれほど見るなどいわれたもの何度も止められたにも関わらず、ついに閨を開けて見てしまいます。するとそこには足は足、手は手、頭は頭と分けた人の死骸が累々と積み重ねられていて、もうものすごい血の臭い、肉の臭いと、むーっとするような感じ、こりゃ大変だ。人が住んでいるところじゃない、あの女性はおかしいと思ったらやっぱり鬼だったんだということで、いそいで修行僧に伝えに行く。そうすると修行僧も、えっそんなに恐ろしいところだったの？とわざわざ見てですね、こりゃ大変だ逃げなきゃと一目散に逃げます。その後の場は後半ですね。お坊さんは逃げていく。そこに、能だどちらに橋掛かりという廊下がついているんですけども、そこからものすごい形相の女性が「まてっ！」と追いかけてきます。その背中には今採ってきたばかりの柴が負われているんです。この女性は断ち切り難い自分の人生を、それでも何とか断ち切りたい。どこかに救いを求めている。今日一晩このお坊さんを騙すつもりはなかった。本当にもてなしたくて薪を取って戻ってきたにも拘らず、自分とのたった一つの約束、「閨を見るな」という約束を守ってもらえず、

じぶんの姿を見顕されてしまった。その恨みで鬼の姿になって出てきた。でも最初からとって食おうと思って待ち伏せていた鬼でなかった証拠だと、負柴を背負って出てくるところが、ほんとにその女性の真心だったんだと演者は解して、私もきっとそうだと思っています。

「イノリ」という囃子の演奏があります。こちらにいるはずの修行者を、みなさん想像してみてください。修行者が戦うのは武器ではなくて、数珠と念仏なんです。祈り伏せてしまおうとする。それが「イノリ」です。その法力と戦って苦しみ悶えながら、なおその法力に打ち勝とうとするが、最後には打ち伏せられてしまうという鬼の姿が描かれています。今日はワキのお坊さんはいませんが、シテの演技で相対して鬼気迫って戦っているワキの姿も是非想像しながら後半もご覧ください。(実演)

辰巳：どうも有難うございました。私でした。替え玉ではありません。今日は短い時間に着替えて、ばばーとやりましたが、ダイジェスト版で「黒塚」の本物のフルバージョンを見たくなくなった人が多くなればいいなと思っています。今日は短い時間でややサービス過剰に押し込みすぎたかもわかりませんが、これで終わらせて頂きたいと思います。

【対談】

秋田巖：濃密な素晴らしい時間をどうも有難うございました。一点だけ、お伺いしたいと思います。狂気という言葉が能において使われるのか。能において「狂い」ないし「狂気」がどのように捉えられているのか。世阿弥がどのように捉えていたのか。そしてまた辰巳先生がどのように捉えておられるのかそのあたりを、少しお話し頂ければと思います。

辰巳：狂気という言葉は、実際、能の謡の中に文句としてございまして、能においては「狂い」も「狂気」も同じ意味として表現しております。たとえば「花籠」(はながたみ)という曲がありまして、越前のお話です。味真野におられた大あとべの皇子が、急に日本の政策的な

ことで継体天皇になる。皇位を継承するために親しくしていた女性に別れも告げないで急遽、都に旅立たなければならなくなった。その形見に花籠と玉ずさ(手紙)を置いていきます。昔、花籠のことを花筐といいました。その花筐を形見に置いていったので、恋しい人に渡す、置いていくものを形見というようになったという大昔の話があります。そのときに物狂いとして、情報を発信しながら自分が継体天皇を追ってきたということをパフォーマンスとして表す。最終的に継体天皇と行き会いまして、天皇が昔のように召し使うから「狂気を留めろ」という言葉があります。もう狂う必要がないよ。それはもちろん恋しい人を探し出すための手段としての物狂いでしたので、当然そこで目的を達成して狂う必要がなくなって、狂気を解くそういうお話もあります。あとは仕舞の後半でお見せしましたように、恨みとか、呪いとか、取り殺してしまいたい。そこまでの狂気ですとか狂いは、なかなか解けないもので、能においては例えば成仏することでしか救われないという手法でやっていると思います。私は個人的には、それでほんとに成仏できるのかどうか、成仏させていいのか、男の方が悪いんじゃないかという話もあるわけですが、ちょっとその辺は微妙なことで。能に於いては、あくまでもパフォーマンス。狂おしい気持ちイコール、パフォーマンスとしてやるわけですけれども、そういう意味で捉えております。

秋田：どうも有難うございました。まだ沢山お尋ねしたいことはあるのですが、時間の関係で残念ながらこの辺で閉じたいと思います。本日はどうも有難うございました。

辰巳：実際の能楽堂というステージがありますので、京阪沿線にも細々とうちも「香里能楽堂」を香里園でやっておりますので、是非いらしていただきたいと思います。どうも有難うございました。

(逐語録作成：中島貴子)